

V 全国研究大会に参加して

第 61 回全国社会教育研究大会兵庫大会に参加して

愛川町社会教育委員会議 議長 萩原 庸元

令和元年 10 月 24 日～25 日に神戸ポートピアホテル・ポートピアホールを会場として、全国社会教育研究大会兵庫大会が開催されました。元号が令和になって初めての記念すべき大会に参加させていただきました。参加するにあたり、県の事務局の皆様方には、細部にわたりご配慮をいただき、不安もなく会場に着くことができました。

受付に行きますと、大会運営される皆様方に心優しい対応をしていただき、座席まで案内していただきました。本大会は、社会教育全国大会のため、全国各地から多くの社会教育関係者の方々が参加され、すでに会場は熱気に包まれていました。

開催行事に先立ち、アトラクションとして兵庫県立高砂高等学校ジャズバンド部の生徒の皆さんの演奏が披露されました。高砂高校ジャズバンド部は年間 40 回近いステージ公演や多数のラジオ・テレビ番組へ出演の他、中高生による Big Band Jazz の甲子園では大会史上初となる 5 年連続グランプリを受賞されたと紹介の通り、素晴らしい演奏で心を打たれました。

開催行事では、主催者であります一般社団法人全国社会教育委員連合会、会長 鈴木 眞理氏より、全国社会教育委員連合会の現状と課題について、また本大会が今回で 61 回を数えることになったとお話をされました。来年はオリンピック・パラリンピックが東京で開催されます。55 年前にも東京で開催がありました。この間、世の中は大きく変化してきましたが、その期間より長い間継続されてきたことに感慨を抱いています。オリンピック・パラリンピック同様、この大会にも社会的使命がありますし、さらに充実した形で継続される必要性を感じており、最後に、本大会が新しい全国社会教育委員連合の活動の方向を指し示す大会であったと、後に語られる大会になることを期待します、と挨拶されました。

次に、全国社会教育研究大会・兵庫大会実行委員会委員長の上羽 慶市氏からは、戦後間もない、1949 年に社会教育法が制定され、70 年が経過。この間、社会教育を取り巻く状況は大きく変化しました。東京一極集中が益々顕著となり、過密問題が深刻化し、急激な少子高齢化は様々な影響を及ぼしています。また高齢者の社会参加やグローバル化の進展と在留外国人の増加は多様な人々と共に生きることが求められ、こうした時代の潮流から、これからの社会教育の方向性が見えてくる、そんな大会になることを期待しています、と挨拶がありました。

また、来賓の文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長 水田 功氏から、人生 100 年時代の到来、グローバル化の進展、人口減少等、社会構造の急激な変化、未来を担う子ども達のためにも、社会教育の果たす役割、重要性は、今後さらに増していく中で、実り多い大会となりますよう、とお祝いの挨拶がありました。

来賓の皆様方の紹介がされた後、表彰式が盛大に挙行され、開催行事が終わりました。

次に、劇団「青年団」主宰の劇作家、演出家の平田 オリザ氏の「わかりあえないことから～多文化共生を目指す演劇教育～」と題した講演では、子どもたちが演劇を創作するコミュニケーション活動や障がい者とのワークショップ、自治体や NPO 等と連携した、総合的な演劇教育活動など、貴重な演劇教育活動についてお話があり、興味深く拝聴させていただきました。

続いて、シンポジウムが行われ、テーマを「時代潮流の変化の中で多様な地域特性を活

かし、高め合う社会教育」について、兵庫県社会教育委員である朴木 佳緒留氏（神戸大学名誉教授）がコーディネーターを務め、5人のシンポジストで行われました。

人生100年時代を迎えようとしている今日、多様な人々の価値観を認め合い、支え合いながら、一人ひとりが主体的に参画できる社会実現が求められています。そのような中、地域社会の一員として暮らす外国人や若者、高齢者など異なる文化的背景のある人々や世代を超えた人々が、地域社会の中でいかに「共生」するかが、これからの社会問題としてクローズアップされることを予測した上での意見交換がされ、大変有意義なシンポジウムとなりました。

2日目は、6会場に分かれて分科会があり、第6分科会（会場：ポートピアホテル南館B1階トパーズ）に参加しました。

第6分科会は85名の参加で、5名程度の小グループの円卓が準備されている会場でした。

第6分科会は「多様性を認め合い、多文化共生をめざす社会の実現」をテーマとして、コーディネーター 伊藤 篤氏（兵庫県西宮市社会教育委員）、助言者 梶山 卓司氏（神戸親和女子大学文学部総合文化学科教授）、問題提起者 大城 ロクサナ氏（ひょうごラテンコミュニティ代表・たかとりコミュニティセンター理事）、司会者 山口 ひろ子氏（兵庫県淡路地区社会教育委員協議会）が紹介され、各自の自己紹介がされた後、提起者の大城氏（日系ペルー人）から実践事例を題材とした詳解がありました。

大城氏は、1991年に日本に在留、日本語も片言、生活も困難の中、在留4年目の1995年1月17日に「阪神・淡路大震災」に遭われました。この地域は殆どの建物が崩壊し、火災によって焼き尽くされ、多くのものを失いましたが、多くの人と出会い、新しい仲間がたくさんでき、その体験を生かし「多文化共生をめざし」活動を始めました。また、大城氏は、日本語がわからない外国人の方々に、防災に備えた対策や易しい日本語に取り組み、スペイン語での防災ガイドブックの製作、紙芝居等、災害に関わる様々な活動を進められました。

さらに、「阪神・淡路大震災」から25年を経て、地域の地縁組織の活動を縦糸に、テーマ別市民活動を横糸として、地域・住民のニーズに合わせて活動を継続されました。毎日試行錯誤の連続で、同じ体験を通して、理解と共感が少しずつ生まれ、それが一人ひとりの実行につながり、まちのルールを作り、その小さな仕掛けづくりのプロセスが成熟した寛容な社会を作っていくことを実感している。しかし、これでよいという理想にたどりつくことはなく、今後も試行錯誤を続けていく大切さを考えている、と成果と課題及び今後の展望を提起されました。その後、グループに分かれ意見交換をしました。

私のグループメンバーは、

鳥取県社会教育委員連絡協議会の方、兵庫県尼崎市社会教育委員の方、

兵庫県淡路地区社会教育委員協議会の方、兵庫県神戸市教育委員事務局の方、そして私の5名で構成されました。

この2日間を通して貴重な体験をさせていただき、また、多くのことを学ばせていただきました。このような機会を与えてくださいました愛川町 小野澤町長、佐藤教育長をはじめ教育委員会生涯学習課事務局、社会教育委員の皆様、県社会教育委員連絡協議会の鈴木会長、県社会教育委員連絡協議会の皆様、そして、全国大会に参加させていただくことで細部にわたり県の社会教育委員連絡協議会事務局の皆様には多大なるご配慮をいただき、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

第 50 回関東甲信越静社会教育研究大会埼玉大会に参加して

藤沢市社会教育委員会 議長 川野 佐一郎

季節は晩秋といえども素晴らしい秋日和の令和元年 11 月 7 日～8 日にかけての 2 日間、埼玉県川越市で開かれた第 50 回関東甲信越静社会教育研究大会埼玉大会に参加してきました。まさに新しい時代の幕開けが、50 回目という記念大会と重なり、名簿上は 1042 名の参加者があり、そのうち約半数が地元・埼玉県各市町からの参加者でした。

残念なことに、我が神奈川県からは 9 名の参加で、1 都 10 県のうち最低人数という寂しさでした。それでも日頃から社会教育委員の研修の機会、他市の委員との意見交換、そして何よりも各地域で実践している委員の奮闘ぶりに学びたいと意欲を持って参加してきましたが、他県の参加者数に圧倒されました。本来ならこのような誌面に登場するような立場ではありませんが、依頼されれば断れない性格上、報告者としての責任を果たします。

1 都 10 県からの参加者を迎える歓迎セレモニーがすでに大ホールで演舞中。一つは埼玉県立飯能高校チアダンス部の皆さん、部員 40 名を数える大所帯でこれまでも日本大会で 1 位、世界大会で準優勝も経験した歴史をもち、昨年は USA Japan チアリーディング&ダンス学生選手権、JAZZ 部門で第 2 位という強者です。もう一つは、川越鳶組合の皆さん、多くの観光客を集める川越まつりで「鳶のはしご乗り」を披露されるそうです。これら若者たちとベテランが融合するように共演し、歓迎ムードいっぱいでした。

「今、時代が変わる、人が変わる、そして社会が変わる ～さあ動き出せ“学び”の先へ～」なんとも勇ましい大会スローガンのもと、おまけに研究主題までついています。「あなたはどうか生きる？人生 100 年時代！～主役はあなた 明るく心豊かな社会の実現～」これらの重厚な文字に励まされても気分は重たく頭は回転しない。研究大会は 50 回もの歴史において、このようなスローガンをいつも掲げてきたのでしょうか？

全体構成は 1 日目、開会行事と基調講演、シンポジウムと情報交換会、2 日目は 5 分科会に分かれての討議（私が出席した第 3 分科会はワークショップ）、それぞれ 100 名前後の参加者でしょう。各分科会の担当者は円滑な運営ができるよう工夫を重ねていましたが、実質的な効果が得られたのでしょうか、定かではありません。しかしながら運営上の苦労や苦心は想像以上のものがあつたとお察しいたします。

研究大会といえども、開会行事やその他をみても交流イベントとしての側面もあり、観光都市川越や埼玉県の産業、観光、歴史などの案内も兼ねていて、たくさんのパンフレットもいただきました。会場となった「ウェスタ川越」は、多数の座席を有するホール、会議室等々からなる県立施設で、隣地には川越市立南公民館も立地されています。

さて、基調講演ですが、「学びがひらく 豊かな人生」と題して野島正也氏（学校法人文教学園大学 理事長）が行いました。先生は 2013 年から学長職も経験し、社会教育現場での実践や社会教育主事の養成に尽力された方です。現在は国をあげて人生 100 年時代の構想に取り組む中、教育社会学の視点から将来社会の分析や生活基盤としての地域コミュニティの重要性にふれ、そうした時代に地域での学び、社会教育事業や公民館活動の課題について述べました。もちろん一人ひとりの住民が個人学習や学び直しに関心を持つことが大事ですが、「地域人として日常生活を楽しむ」ことも強調され、結論として「社会教育を通して、人は地域の中でもっと『元気』になれる」と講演を締めくくりました。とりわけ、この結論部分は配付された資料においてゴジック強調文字を使っていたので、一番言いたかったことと推察いたします。私たちも日ごろの社会教育委員活動において目的や役割は意識として自覚していますので特に新基軸とはいえませんが、再確認の意味で提言されたと思います。

続いてシンポジウム。ここから研究主題をテーマとして、4 人のシンポジストが実践事例の発表です。さすがに日頃から地域でさまざまな活動をされている方たちなので、経験談を中心に豊富な話題が提供されました。発表に多様性があるほど聴き入ってしまいます。特に本川越駅前

観光案内所のお手伝いをされている現役大学生の話は爽快感がありました。また、あおぞらいちごマーケットを主催している母親、子どもの居場所づくりに関わって青少年育成活動を続けている方、サードプレイスとして位置づけるカフェを通じての若者支援をされている方など、実践的・日常的な営みが、いわゆる〈地域づくり〉としてダイナミックな取組みにつながっていきます。4人に共通しているキーワードは、「子ども・若者」であり、どんどん引き込まれる、ある種の高揚感を感じました。充実したシンポジウムほど時間不足になり、コーディネーター、アドバイザーの発言が気になりました。内容のコンパクトさと時間の問題はいつも悩みの種でしょう。

さて、2日目は5会場に分かれて分科会です。私が参加したのは「市民と行政のパートナーシップ」（参加者数 86 名）でした。それ以外の内容及び参加者数は、「社会教育の担い手としてのあり方」（176 名）、「人生 100 年時代における社会教育の実践」（253 人）、「人材発掘、養成、フォローアップのあり方」（106 名）、「社会教育のネットワークづくり」（92 名）でした。あらかじめ大会要項集には「分科会のリノベーション」と題して、「いま、地域活動においては、これまで培ってきたノウハウの伝承や組織の維持が課題の一つとなっています。（中略）地域のみんがポジティブに地域づくりに参加できるようなモチベーションを生み出すには、実施する活動を地域に求められる形に昇華する必要がある」という実行委員長のメッセージが掲載されています。50 回目を数える記念大会の成否は分科会にありという意気込みが語られていたように思います。

しかし、第3分科会「市民と行政のパートナーシップ」では事例として、①NPO 法人さやま生涯学習をすすめる市民の会、②富士見市地域子ども教室、③町ぐるみん（愛称）白岡が紙上掲載されていましたが、発表は一切行なわれることなく、ファシリテーターの主導でグループワークにより課題研究が進んでいきました。NPO 法人 みらいず works 代表理事の小見まい子氏によって、あらかじめ課題が設定され、そのつどグループのメンバーを替えて協議していくワークショップ方式。新鮮さは感じられましたが、短時間のうちに結論がでないので内容が深化しないばかりか、多人数のため進行に工夫したと思いますが、参加者の関心度や経験年数の相違もあって、午前中のメニューとして消化しきれず時間的な制約が課題として残りました。

実際には他分科会まで参加できませんでしたので、事例発表もしくは話題提供された実践や研究レポートなどを要項集から転載しておきます。「社会教育の担い手としてのあり方」①埼玉県久喜市、「人生 100 年時代における社会教育の実践」①浦安市における回想法の展開 ②市ヶ尾ユースプロジェクト、「人材発掘、養成、フォローアップのあり方」①埼玉県学校応援団、「社会教育のネットワークづくり」①関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会 ②子ども大学 ③埼玉県社会教育委員会議建議（平成 29 年 2 月）「学びの循環」を広め、地域での学びの成果を活用するために、等々でした。各実践事例に興味をひかれた方は、「大会報告集」（令和 2 年 3 月中には発行予定）をご覧ください。

大変バラエティのある社会教育研究大会でした。まとめに苦勞するくらい多様性に富んでいますが、私の感想を述べてみます。改めて感じたのは地域活動のとらえかたです。社会教育活動は「地域」をステージとして展開されますが、それはどこのエリアを指しているのでしょうか。お互いに共通基盤を考慮して議論しない限り、活動報告も意見交換も相互に理解しあうことは難しいと思いました。

藤沢市では地域公民館が並列で建てられていますので、「公民館区」における地域活動や人的ネットワークを中心として機能することが大切であると考えています。そのうえで他の社会教育施設、文化施設、スポーツ施設の活動と住民の自治的・自主的な組織や活動、情報などを「つなぐ」ための条件整備を第一義的に考えています。社会教育委員は、大局的な立場から社会教育活動を進める「生涯学習ふじさわプラン」を基本に、計画づくりや評価・進捗管理を行い、市民や行政の「求めに応じて」助言できるような実質的な審議を重ねています。ぜひ他市の社会教育委員の皆さんと協調・連携していきたいと考えています。

第 51 回の関東甲信越静社会教育研究大会は、令和 2 年 11 月 11 日～12 日、新潟県長岡市を会場として開催が予定されています。神奈川県からも大勢で参加しましょう！